

女兒向けコミック雑誌テキストの訴求構造の変遷

乗上美弥[†] 留岡里和[†] 中村衣里[†] 平井秋佳[†] 伏脇渚[†] 古川晴子[†] 八島有希[†] 高田明典[†]
フェリス女学院大学文学部[†]

1. はじめに

昨今、出版物の販売部数の低迷が指摘される中、少女向けコミック・少女漫画は一頃よりかなり部数を減らしているものの、なお数十万部の販売実績を有しているものも少なくない。少女向けコミック誌は、1960年代から現代に至るまでのあいだ、おおむね9歳から14歳程度の女子児童・女子生徒の中心的情報源であったと言える。筆者らはこれまで、物語構造分析の手法を用いてアニメ・小説・CM・コミックなどの訴求構造分析を行ってきたが、これまでの分析手法のもとでは、多数の物語に共有されている価値観を包括的にとらえることは、不可能とは言えないまでも容易ではない。また、大量のテキストから物語構造を抽出するという作業は、テキストが数十万文字となるような場合には現実的ではない。本研究においては、テキスト分析の手法を援用することによって、少女向けコミック雑誌の内容分析を行い、その1970年代から現代にいたるまでの変遷を追うことを通して、そこに表現されている訴求構造の推定を試みた。分析対象としては、1970年代から現在までに発行されている主要な女兒向けコミック雑誌とし、その文字表現にのみ着目した分析を行った。

2. 分析方法

対象とする文の単位(文オブジェクト)にどのような単語が含まれているかを示す「文オブジェクト-単語共起行列」を抽出し、主として単語の出現頻度分析を行うことによって、使用頻度の高い単語がどのように変化しているかを抽出する。

3. 分析対象

1979年から2009年にかけて発行された女子児童・生徒向けコミック雑誌を約10年ごとに選択した。1979年・1989年・1999年に関しては原則として3冊ずつ選択、2009年に関しては7冊を選択し、合計15誌が対象とされた。

(1979年) 3誌 24タイトル

週刊少女フレンド 1979年第18号
別冊マーガレット 1979年4月号
週刊少女コミック 1979年第4号

(1989年) 2誌 16タイトル

花とゆめ 1989年2号
別冊マーガレット 1989年2月号

(1999年) 3誌 25タイトル

花とゆめ 1999年2号
月刊少女フレンド 1999年11月号
少女コミック 1999年1月20日号

(2009年) 7誌 90タイトル

ちゃお 2009年12月号
Betsucomi (ベツコミ) 2009年12月号
別冊花とゆめ 2009年12月号
マーガレット 2009年11/20号
別冊マーガレット 2009年12月号
なかよし 2009年12月号
りぼん 2009年12月号

入力した作品数は計155タイトル、合計398671文字/25905行であった。

4. 分析の手順

4. 1. 文オブジェクトの抽出

分析対象とするテキストは、コミックの本編中の文字列のみとし、また、原則としてセリフのみを分析対象とした。つまり、状況の説明やト書きに該当する部分はすべて捨象し、原則として「吹出し」の中に記述されているもののみを対象とした。ただし、吹出しの中に記載されておらず、図中にあるものであっても、明らかに登場人物の内言や内心の表現であると思われるものや、セリフであることが明らかであるものに関しては、分析対象とした。一つの作品を一つの文オブジェクトとし、合計155の文オブジェクトが構成された。それぞれの文オブジェクトは、タイトルごとに一つのテキストファイルにまとめられ、また、年ごとに区分された。

4. 2. 単語頻度の計測

4. 1. で示した方法によって抽出された文オブジェクトのデータ列から単語を抽出し、年ごとの単語の頻度を計測した。形態素解析はMeCabを用いて行い、頻度の計測はRMeCabを用いて行った。抽出する単語は、名詞・形容詞・動詞とし、形容動詞・助詞・助動詞・数詞・接続詞などは分析対象からは除外した。

5. 結果および考察

1979年の少女向けコミック誌3誌において出現頻度の高かった名詞の1位から4位は「こと(1.63%)」「人(1.19%)」「あたし(0.99%)」「ちゃん(0.92%)」(いず

Transitions of Appealing Structure in Japanese Girls Comic Books 1979-2009.

[†] NORIAGE Miya, TOMEOKA Rina, NAKAMURA Eri, HIRAI Akika, FUSHIWAKI Nagisa, FURUKAWA Haruko, YASHIMA Yuki, TAKADA Akinori.

[†] Faculty of Letters, Ferris University.

れもかっこ内は、1979 年度分析対象テキストの総名詞数 12006 に対しての比率) であった。ここでは、人称表現に着目し、分析結果の一部を示す。まず、1 人称に関して、特に女性が多く使用していると推測される 1 人称の名詞の変遷を図 1 に示した。「わたし」が使用されなくなり、「私」に代わっていく様子が見られるが、これは他の単語でも同様に見られる漢字化傾向である。全体として 1 人称の出現頻度は 1979 年から順に、196 (1.6%), 167 (1.8%), 226 (1.6%), 755 (2.0%) と上昇しており、1979 年と 2009 年間の出現頻度の差は統計的に有意である (比率検定, $df = 1, p < 0.01$)。少女向けコミック誌においては、女性が自分のことを 1 人称代名詞で呼ぶ機会が多くなっているといえる。また、2 人称についての同様の分析を図 2 に示した。ここにおいては、2 人称の出現頻度が有意に低くなっている (比率検定, $df = 1, p < 0.001$)。さらに、図 3 に示したように、「みんな」「いっしょ」「～たち」「～達」などといった人の凝集状態を示す単語 (凝集性単語) の出現頻度は、特徴的な変遷を示している。これらの単語は 1979 年から、177 (1.47%), 35 (0.38%), 138 (0.99%), 468 (1.26%) (かっこ内は、各年度の名詞出現総数に対しての比率) というように、1989 年のテキストとでは急激に出現頻度が低くなり、そのち回復するように上昇している。1979 年と 2009 年の比率の差は、統計的に有意であるとは言えないが (比率検定, $df = 1, p = 0.085$)、それ以外の組み合わせ (1979-1989, 1979-1999, 1989-1999, 1999-2009) はすべて有意である。

上記の分析のみから推定しうることはそう多くはないが、2009 年の少女向けコミック雑誌の潜在意味分析に見られたような「私的-公的」という対立関係や「孤独-凝集」に対しての価値観の変化が示唆される。また、その他、形容詞、動詞などの出現頻度の変遷を見ることによっても、同様のことが示唆されるとともに、恋愛に対しての価値観や距離感の変化を見ることができる。

文献

- [1] 石田基広: R によるテキストマイニング入門, 森北出版, 2008.
- [2] 和多太樹, 関隆宏, 田中省作, 廣川佐千男: 単語の出現頻度に着目した病院評判情報の分析, 情報処理学会研究報告, SLP, 音声言語情報処理, 2005 (50), pp. 15-20.
- [3] 豊田秀樹: データマイニング入門, 東京図書, 2008.
- [4] 重久礼美, 高田明典: 映像作品の物語構造分析の自動化に関する一研究, 多文化・共生コミュニケーション論叢, (2), pp. 11-22, 2007.

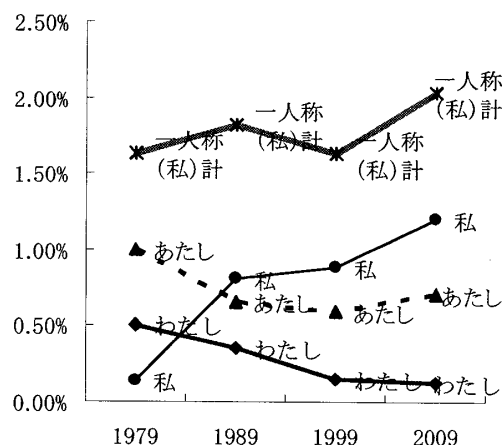


図 1 1 人称の出現頻度の変遷

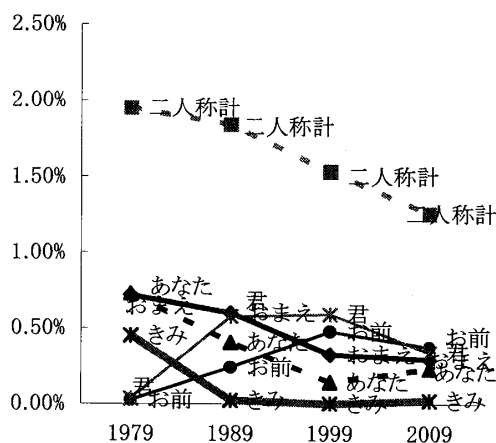


図 2 2 人称の出現頻度の変遷

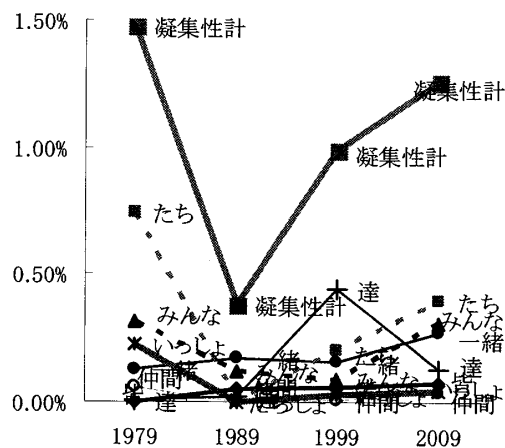


図 3 凝集性単語の出現頻度の変遷